

〈金光明經〉漢訳諸本の翻訳と伝承に関する諸問題

— 史伝・経録類にみえる記述を中心として — *

宮崎 展昌

一、はじめに——本稿の目的と方法——

中期大乘経典のひとつに数えられる〈金光明經〉(Sk.: *Suvarṇaprabhāsa / Suvāriṇī(pṛa)bhāsotāma sūtrandarjīa*)には、次の三種の漢訳経典の現存が知られる。

- 曇無讖訳『金光明經』(四卷本、大正六六三番)：五世紀前半、北涼にて訳出
- 宝貴合『合部金光明經』(八卷本、大正六六四番)：六世紀末、隋代に編纂
- 義浄訳『金光明最勝王經』(十卷本、大正六六五番)：八世紀はじめ、武周代に訳出

最初の漢訳本とされる曇無讖訳が五世紀前半に訳出されたことから、〈金光明經〉という大乘経典が編纂され、成立したのはおよそ四世紀ごろと目されている。しかし、八世紀はじめに訳出された『金光明最勝王經』(以下『最勝王經』)と略称にみるように、同経は徐々に増広されて、義浄訳に含まれる陀羅尼の数が顕著に増えていることからわかるように、密教の影響を次第に受けて、いわゆる密教的要素を多く含むようになっていったとみられる。¹⁾なお、右の〈金光明經〉漢訳本三種の構成については、現存のネパール系のサンスクリット語本(ノーベル刊本)と比較する形で本

稿末尾に比較対照表を掲げておく。⁽²⁾

本稿で扱う、〈金光明経〉漢訳諸本に関する問題はおおよそ次のとおりである。第一に、『最勝王経』に先行する漢訳諸本について、その訳出・編纂事情や流伝の状況などについて、史伝や経録類における記述を中心に整理・調査することを試みる。あわせて、義浄訳『最勝王経』については、同本の訳出状況をつたえる経録類の記述や訳場列位について改めて紹介し、本稿と関連する、ワークショップで発表された他の論考二篇とも連絡を図りたい。

第一の問題、すなわち、『最勝王経』より前の〈金光明経〉漢訳諸本に関する問題について、もう少し詳しく見てから、次節以降の具体的な調査・検討に移りたいと思う。

この第一の問題点については、『合部金光明経』（以下『合部』と略称）の編纂過程に関する問題に集約できるだろう。すなわち、第三節でも詳しく見ていくように、隋代に宝貴によって編纂されたと伝わる『合部』は、先行する曇無讖訳四卷本および真諦による訳出部分、耶舍崛多の訳出部分、そして闍那崛多によって訳出された部分を統合・編纂してできた、いわゆる「編輯経典」である。⁽³⁾ 一方で、『合部』そのものは、独立単行経典である〈金光明経〉に対応する漢訳経典とみなされてきた。大乘経典に関しては、時代を経るにつれて内容が拡充されていく「増広」という現象が広く知られ、中国においては、基本的に、翻訳者それぞれが典籍全体を訳出し、複数の漢訳本が残されることで、その増広過程を知ることができる。しかし、『合部』については、中国において、翻訳者・編纂者らが既存の漢訳本と新たに入手しえたインド語テキストを比較して、新たに増広されたところのみを訳出し、それらを既存のものに付加していくという方式で生み出された、かなり特殊な漢訳経典と言える。⁽⁴⁾ そのような『合部』については、曇無讖訳や義浄訳に比べて、東アジア世界でそれほど重視されたことがなかったこともあってか、特殊ともいえる、その編纂過程についてはこれまであまり論じられたことはないようである。⁽⁵⁾

そこで、本稿では『合部』の編纂過程やその背景事情を明らかにするため、まず、同漢訳経典成立の前提となった、

曇無讖訳四卷本とそれと関連が深い真諦訳とされる六卷あるいは七卷本の訳出と流伝の状況について、史伝・経録類や経序などの記述から検討する。それに付随する問題として、曇無讖訳四卷本について、版本大蔵経諸本において出入が見られる点についても整理する（以上、第二節）。ついで、『合部』編纂をめぐる、その訳出状況を記した経序およびそれに類する経録類の記述を確認してのち、耶舍崛多訳とされる五卷本や闍那崛多による訳出部分に関する流伝の問題、そして、それら訳経者らと『合部』編纂の関わりなどについて検討したい（以上、第三節）。

《金光明經》の漢訳諸本に関する訳出や伝承については、すでに藤谷「二〇〇四」によっても扱われており、そこでも整理、検討されている。⁶⁾ただし、同論では、日本で撰述された注釈書にもとづくかたちで検討されており、本稿で試みるような、中国で撰述された史伝・経録類の記述に直接あたって、それらを批判的に調査、検討しているわけではない。現在は、それら中国で編纂された史伝・経録類へのアクセスも可能であり、大正蔵全文テキストデータベースも活用することで、⁷⁾特定の典籍における言及の有無などについてもある程度の確度をもって確かめることができ、批判的に扱うことができる。そこで、本稿では、右のような《金光明經》漢訳諸本の訳出および伝承をめぐる諸問題について、研究ノートとして、史伝・経録類に見える記述を中心に整理・検討することを試みたい。なお、本稿で扱う経録類については次の表一のとおりである。⁸⁾

二、曇無讖訳および真諦訳の訳出と流伝について

本節では、曇無讖訳『金光明經』四卷本、および、同本と関連が深いと考えられる真諦訳とされる六卷あるいは七卷本について扱う。特に、後者は『合部』編纂にも直接的な影響を及ぼしたと考えられ、史伝・経録類における、右の両経に関する訳出と流伝の記述を洗い直すことで、『合部』編纂につながる背景や状況を整理する。

表一 本稿で扱う経録類一覧

撰者・タイトル(別名、通称)	王朝・年代	概要および特色
僧祐『出三蔵記集』	梁・六世紀初頭	現存最古の経録。道安録も内包
法経『衆経目錄』(法経録)	隋・五九四年	既存の経録にもとづいて編纂された標準目錄(『机上の経録』)
費長房『歴代三蔵紀』(長房録)	隋・五九七年	史伝と経録を組み合わせたもの、撰者による「創作」も多分に含む
彦琮『衆経目錄』(仁寿録、彦琮録)	隋・六〇二年	長安・大興善寺経蔵の現存目錄
静泰『衆経目錄』(静泰録)	唐・六六三年	長安・大敬愛寺経蔵の現存目錄
道宣『大唐内典録』(内典録)	唐・六六四年	西明寺の現存目錄含む
明佺『大周刊定衆経目錄』(大周録)	武周・六九五五年	武则天のもとで編纂された経録
智昇『開元釈教録』(開元録)	唐・七三〇年	のちに大蔵経の標準目錄とされる
日照『貞元新定釈教目錄』(貞元録)	唐・八〇〇年	日本では一切経の標準目錄とされる

以下では、まず、曇無讖訳四卷本の訳出および流伝をめぐる状況、ならびに、曇無讖訳の四卷本に真諦が新たに訳出した部分を加えたとされる六卷あるいは七卷本の伝存状況について、史伝・経録類における記述を調査・整理すること、『合部』編纂前の両経の伝存状況を推測する。さらに、真諦訳をめぐる訳出状況についても、同訳の経序とされるものやそれに類する史伝・経録類における記述を紹介、整理して検討する。あわせて、曇無讖訳四卷本についての版本大蔵経諸本における出入についても整理する。

(1) 曇無讖訳四卷本の訳出および流伝に関する記録

経録類における、曇無讖訳四卷本についての記述を整理する前に、はじめに、『高僧伝』卷二「訳経篇 曇無讖第七」にみえる、彼の訳業と『金光明経』訳出に関する記述を確認する。

「…讖以久処致厭、乃辞往罽賓、齎大涅槃(前)分十卷并菩薩戒经・菩薩戒本等。彼国多学小乘、不信涅槃、乃東適

龜茲、頃之、復進到姑臧、止於伝舎。…(中略)…河西王沮渠蒙遜僭拠涼土、自稱為王、聞讖名、呼与相見、接待甚厚。蒙遜素奉大法、志在弘通、欲請出經本。讖以未參土言又無伝訳、恐言舛於理、不許即翻。於是學語三年、方訳写初分十卷。時沙門慧嵩、道朗独歩河西、值其宣出経蔵、深相推重、転易梵文、嵩公筆受。道俗數百人、疑難縦横、讖臨機积滞、清弁若流、兼富於文藻、辞製華密、嵩・朗等更請仏出諸経。次訳大集・大雲・悲華・地持・優婆塞戒・金光明・海龍王・菩薩戒本等六十余方言。讖以涅槃経本品數未足、還外国究尋、值其母亡、遂留歳余、後於于闐更得経本中分、復還姑臧訳之。後又遣使于闐尋得後分、於是統訳為三十三卷。以偽玄始三年初就翻訳、至玄始十年十月二十三日三奏方竟、即宋武永初二年也。讖云「此経梵本本三万五千偈、於此方減百万言。今所出者、止一万余偈！」

〔讖所出諸経至元嘉中方伝建業。道場慧観法師、志欲重尋涅槃後分、乃啓宋太祖資給遣沙門道普、将書吏十人、西行尋経。至長広郡舶破傷足、因疾而卒〕(大正五〇・三三七上)

右に引用したように、曇無讖の訳業の中心であったのは、紛れもなく『大般涅槃経』である。彼は沮渠蒙遜が支配する北涼の姑臧にとどまりながら、慧嵩と道朗の助力も得て、同経を訳出し、その後続部分の探索と訳出を生涯にわたって続けた(波線部)。そうした中で、『大集経』(前分とされる三十卷分)や『大雲経』『悲華経』などとともに、『金光明経』を訳出したようである。それらの典籍の訳出にも慧嵩と道朗の兩名が携わっていたものと推察できる(傍線部)。また、右の二つ目の引用冒頭にあるように、曇無讖が訳出した典籍群は、元嘉年間(四二四〜四五三年)には、建業、すなわち、江南の地に伝播していたようである。⁹⁾

次に、曇無讖訳四巻本に関する訳出および流伝に関する経録類における記述を整理する。ここでは、経録類中での「訳出」と「流伝」の記述について分類することを試みる。経録類では、当該典籍の訳出にまつわる状況を伝える「伝訳」の記述と、衆経・一切経における当時の経巻の伝存状況をつたえる、現存目録や入蔵録は分けて記述されること

が多い。特に、後者の記述に注目すれば、当該典籍が当時の衆経とも呼ばれた一切経、大蔵経に含まれていたかどうかを探ることができるだろう。

まず、曇無讖訳四卷本についての、経録類における記述は以下の通りである。

① 【伝訳】梁・僧祐撰『出三藏記集』卷第二「録上 新集経論録第一」

「金光明経四卷（宋元明本、宮内庁本はここで「玄始六年（四一七）五月出」を挿入）…（中略）…

右十一部、凡一百四卷、晋安帝時、天竺沙門曇摩讖至西涼州、為偽河西王大沮渠蒙遜訳出、或作曇無讖」

（大正五五・十一中下）

② 【伝訳】隋・費長房撰『歴代三蔵紀』卷第九（代録）

「沙門曇摩讖 二十四部」（大正四九・八三上）

「金光明経四卷 第一出、十八品
見竺道祖河西録」（大正四九・八四中）

③ 【伝訳】唐・道宣撰『大唐内典録』卷第三「歴代衆経伝訳所従録第一之三」（代録）「北涼沮渠氏伝訳仏経録第

九」

「金光明経四卷 第一出、十八品
見道祖河西録」（大正五五・二五五下）

④ 【伝存】武周・明佺撰『大周刊定衆経目録』卷第三「大乘重訳経目卷之二」

「金光明経一部四卷 五十
六紙

右北涼玄始年沙門曇無讖於姑臧訳。見長房録」（大正五五・三八八上）

⑤ 【伝存】武周・明佺撰『大周刊定衆経目録』卷第十三「見定流行入蔵録卷上」

「金光明経一部四卷 六十六紙

金光明経一部七卷 或八卷或六卷
一百五十紙

右二經十一卷同帙」(大正五五・四六二中)

⑥【伝訳】唐・智昇撰『開元釈教録』卷第四「総括群經錄上之四」(代録)

「金光明經四卷

初出一十八品、見竺道祖河西錄及僧祐錄与新訳金光明最勝王經等同本。今入八卷合經中、此四卷者在刪繁録」(大正五五・五一九下)

右に挙げたもので、曇無讖訳四卷本の「伝存」に関する記述は、『大周録』における記述④⑤に限られる。特に、⑤「見定流行入藏録」は、各地の入藏録を統合したものとみられ、かなり特殊な入藏録である。他はいずれも曇無讖訳の「伝訳」、すなわち、訳出状況に関する記事であり、当時の経巻の伝存をつたえるものではない。また、四卷本に関する記述を含まないので右には掲げていないが、『法経録』『仁寿(彦琮)録』『静泰録』といった、当時の衆経(一切経)目録で、経巻の伝存をつたえる経録類にも記載がないことは注意したい。

以上見てきた経録類の記述においては、曇無讖訳の伝訳、訳出状況を伝える記述は複数確認できるが、その経巻の伝存をつたえる記述は一部に限られることが確認できた。

(2)曇無讖訳に真諦訳出部分を加えた六卷あるいは七巻本に関する伝存の記録

次に、経録類における、曇無讖訳四巻本に真諦が新たに訳出した部分を加えたとみられる六巻あるいは七巻本に関する「伝存」の記述を確認する。先の曇無讖訳四巻本とは対照的に、六巻あるいは七巻本に関しては、「伝存」をつたえる記述はほぼ一貫して経録類に確認できる。

・隋・法経撰『衆経目錄』第一(「既存の経録をまとめた「机上」の標準目錄)

「金光明經七卷北凉世曇無讖訳、後三卷陳時真諦訳」(大正五五・一一五上)

・隋・彦琮撰『衆経目錄』第一(「大興善寺経蔵の現存目錄」)

「金光明經六卷或七卷 北凉世曇無讖訳、後三卷陳時真諦訳」(大正五五・一五一上)

・唐・静泰撰『衆経目錄』第一（『大敬愛寺経蔵の現存目錄』）

「金光明経六卷或七卷八卷
百二十二紙」北涼世曇無讖訳、後三卷陳時真諦訳」（大正五五・一八二中）

・唐・道宣撰『大唐内典録』卷第六「歴代大乘蔵経翻本单重伝訳有無録第二」（『標準目錄』）

「金光明経六卷或七卷八卷
百一十五紙」北涼曇無讖訳前四卷、後三卷者陳時真諦訳」（大正五五・二八七上）

・唐・道宣撰『大唐内典録』卷第八「見入蔵録第三」（『西明寺経蔵の現存目錄』）

「金光明経六卷
一帙」（大正五五・三〇三中）

右に掲げたものはいずれも「伝存」をつたえる記述であり、隋代から唐代に至る経録類で一貫して確認できる。（ただし、『開元録』における記述については本節第四項であつかう。）加えて、先の⑤『大周録』「見定流行入蔵録」の記述も、曇無讖訳の四卷本とともに、六卷あるいは七卷本の伝存を示したものである。同時に、右に掲げた経録類では、曇無讖訳四卷本の伝存に関する記述が確認できないことも留意したい。ちなみに、現存最古の経録である『出三蔵記集』については、真諦が活躍した時期よりも撰述年代が先行するので、当然ながら、その記述は欠く。

前項および本項で検討した事柄をまとめると、曇無讖訳四卷本については、経録類において、衆経、一切経における伝存をつたえる記述はかなり早い時期から見当たらないのに対し、曇無讖訳と真諦による訳出部分とが合わさった六卷あるいは七卷本の伝存の記述については、隋代以降、経録類にほぼ一貫して確認できる。このことから、衆経、一切経においては、かなり早い段階から、曇無讖訳の四卷本に代わって、真諦訳出部分を加えたかたちの六卷あるいは七卷本が伝存するようになっていた、と推測できるだろう。

そして、次節でも詳しく見ていく、『合部』八卷本が編纂された背景として、その当時、すでに曇無讖訳と真諦訳が組み合わさった六卷あるいは七卷本が先行してある程度流布していたことが影響した可能性も考えられる。このこと

は、次節でも見る『合部』八巻本の経序やそれに関連する記述のなかで、真諦訳の経序とされる文言が引用されて、最初の翻訳である曇無讖訳が不完全と見られていたところに、真諦による訳出部分が付加されて六巻あるいは七巻本が編纂され、さらにその流れを受けるかたちで『合部』が編纂されたことが説明される。すなわち、『合部』成立の背景・要因のひとつとして、当時、すでに曇無讖訳に真諦訳出部分が組み合わさった六巻あるいは七巻本がある程度先行して流布していたことがあったとみられる。

(3) 真諦訳出部分の翻訳に関する記述

本項では、曇無讖訳四巻本と真諦が訳出した部分を組み合わせた六巻あるいは七巻本について、その訳出を伝える記述について整理、検討する。

まず、大正蔵には含まれていないためか、これまで注目される機会が限られていた記述として、聖語藏経巻中の「神護景雲経」とされてきた経巻にみられる、真諦訳本の経序とされる「金光明経序」を紹介する。この記述については、すでに小野玄妙が早くから注目し、その著作等でも紹介されてきたようであるが、船山〔二〇一九〕では、後でも紹介する『合部』経序での被引用部分や『歴代三宝紀』『大唐内典録』にみえる並行する記述と詳細に比較する形で収録されており、ここではそれを引用する。¹³⁾

「曇無讖法師云、『金光明経』、篇品闕漏、每尋文揣義、謂此説有徴、而讐檢無指、永懷寤寐。梁武帝愍三趣之輪廻、悼四生之漂被、汎宝舟以救溺、秉慧炬以照迷。大同中、扶南献使還反外国、勅直後苴破虜監張記等、随往扶南、求請名僧及大乘諸論『雜華』等经、彼国乃屈西天竺優禅尼国三藏法師波羅末他、梁云真諦、并齋経論、恭膺帝旨。法師遊歴諸国、故在扶南、風神爽悟、悠然自遠、群歲淵部罔不研究。太清元年、始入京邑、引見殿内。武帝躬申頂礼、於宝雲供養、欲翻経論。寇羯憑陵、大法斯舛、国難夷謚。僧隱始得諮揀法師、経目果闕、二三身分

別「業障滅」「陀羅尼最淨地」「依空滿願」等四品。宿昔蒙惑、煥若披雲、傾身半偈、幸聞先旨、折骨書寫、踊躍甘心。以承聖二年二月廿五日、於建康長凡里楊雄宅別開道場、仰請翻文。以三月二十日、乃得究訖。法師在都稍久、言説略通。沙門慧宝洞解殊語、伝度明了、曾无擁礙。菩薩戒弟子蘭陵蕭碯字純臣、脱略荣利、深念火宅、絹句詮旨、詳審无遺。依所翻經本。次第以為七卷、品部究足、始自于斯、文号経王、義称深妙。願言幽顯、頂戴受持」

右の引用文で傍線を施したように、真諦は「三身分別」「業障滅」「陀羅尼最淨地」「依空滿願」などの四品を新たに訳出し、七巻本としたようである。

また、引用文冒頭にあるように、曇無讖は、訳出した『金光明経』について「篇品闕漏」と考えていたとする。しかし、この記述は、先に確認したように、『高僧伝』が伝える、曇無讖が生涯をかけて取り組んだ『涅槃経』の訳出と探索、そして同経に対する彼の思いと混同している可能性も考えられる。つまり、『金光明経』四巻本を、翻訳者である曇無讖自身が不完全であるとみていたかどうかについては、この真諦訳の経序とされる記述にみられるものであり、実際のところはどうかであったかは不明である。

なお、聖語蔵経巻では、右の経序の冒頭では「僧隱別訳」とされ、その「別訳」の意味するところもやや不分明であるが、この経序の著者は「僧隱」であると、小野は見ているようである。

次に、小野も指摘するように、真諦訳六巻あるいは七巻本の訳出年代やその状況に関する記述について、右に引用した聖語蔵経巻所収の経序とは記述が若干異なるものが、次のように史伝・経録類に確認できる。

●『歴代三三玉紀』巻第十一（代録）

「金光明経七巻 承聖元年於揚州正觀寺及揚雄宅出、即第二訳与涼世曇無讖所出者四品全別。又広寿量品、後慧宝伝、蕭梁筆受」（大正四九・九八下）

●唐・道宣『続高僧伝』巻第一

「真諦遠聞行化儀軌聖賢、搜選名匠、惠益民品。彼国乃屈真諦、并齎經論、恭膺帝旨、既素蓄在心、渙然聞命、以大同十二年八月十五日達于南海。沿路所經、乃停而載。以太清二年閏八月、始届京邑、武皇面申頂礼、於宝雲殿竭誠供養。諦欲伝翻經教、不羨秦時、更出新文有逾齊日、属道銷梁季、寇羯憑陵、法為時崩、不果宣述、乃步入東土。又往富春令陸元哲、創奉問津、将事伝訳、招延英秀。沙門宝瓊等二十余人、翻十七地論、適得五卷、而国難未静、側附通伝。至天保三年、為侯景請、還在台供養。于斯時也、兵饑相接、法幾頽焉。会元帝啓祚承聖清夷、乃止于金陵正觀寺、与願禪師等二十余人、翻金光明經、三年二月、還返予章」(大正五五・四二九下)

●『大唐内典録』卷第四「歴代衆経伝訳所従録第一之四」(代録)

「金光明経七卷」承聖元年於正觀寺及楊雄宅出、是第
二訳。与涼世曇無讖出者、全長四品(大正五五・二六六上)

●『大周刊定衆経目録』卷第三「大乘重訳経目卷之二」(標準目録)

「金光明経一部七卷」或八卷、或六卷、
一百一十五紙

右梁世承聖元年沙門真諦、於正觀寺及楊雄宅訳。見長房録」(大正五五・三八八上)中)

●『開元釈教録』卷第六「総括群経録上之六」(代録) 〓 『貞元新定釈教目録』卷第九(大正五五・八三六中)

「金光明経七卷」或六卷、二十二品。承聖元年於正觀寺及楊雄宅出。
者有十八品、真諦更出四品、足前成二十二分、為七卷、今在刪繁録(大正五五・五三八上)

先に引用した、聖語蔵経卷にみえる経序では、「承聖二(五五三)年二月二十五日」から同年の「三月二十日」までの間に「楊雄宅別閣道場」にて、沙門慧宝や在家信者の蘭陵蕭碯に助けられるかたちで、真諦は『金光明経』を訳出したとされる。その翻訳を補助した二名については、『歴代三宝紀』(波線部)にも見えるが、他の史伝・経録類には確認できな。

それに対して、右で引用した史伝・経録類の多くでは、「承聖元(五五二)年」に「正觀寺及楊雄宅」において訳出したとする。年代は一年相違し、経序には見えない、「正觀寺」という場所が言及されている。また、『続高僧伝』で

は、訳出年代への言及はないものの、「願禪師等二十余人」とともに訳出したという記述が見える。

史伝・経録類の記述と先の経序では、右のような相違点が確認できるが、いずれが正確なものを記しているのかは現時点では判断としない^⑬。

また、史伝・経録類では、真諦は自らが新たに訳出した部分に、曇無讖訳四卷本を合わせることで「七卷本」としたことが明記されている。なお、『歴代三宝紀』で言及されているように、真諦が「寿命品」を拡充したことについては(波線部)、先に引用した経序に続く、聖語藏経卷の卷一「寿命品」に、現行の『合部』には見えない文言が確認でき、それらが、真諦によって増広された部分に対応する可能性も考えられる^⑭。

(4) 版本大蔵経諸本での曇無讖訳四卷本の出入

本項では、まず、『開元釈教録』において、曇無讖訳四卷本および真諦訳出部分を加えた七卷本(あるいは六卷本)が「不入蔵」とされる記述を確認する。

・「唐・智昇撰『開元釈教録』卷第十七「別録中刪略繁重録第四」

「新括出合人大部経五十二部一百四十一卷(中略)」

金光明経四卷^{八品} 十 北涼三蔵曇無讖訳

金光明経七卷^{二十二品、或六卷} 陳三蔵真諦全訳四品合成七卷

金光明経更広寿量^{大弁陀羅尼経五卷、統四卷本} 周宇文氏三蔵耶舍崛多統寿量大弁二品

右隋興善寺沙門宝貴取前三本及闍那崛多所訳銀主・囑累二品、総二十四品、合成八卷。前之三本並合入中、

一無増減、其八卷成者留之入蔵、上之三本既重故略」

・唐・智昇撰『開元釈教録』卷第二十「入蔵録卷下」

「金光明經四卷」八品

金光明經七卷或六卷二
十二品

右二部一十一卷、与蔵中八卷者文句不異。其八卷本、品数備足、故留入蔵、此二皆闕、故不存之。其八卷本有二十四品

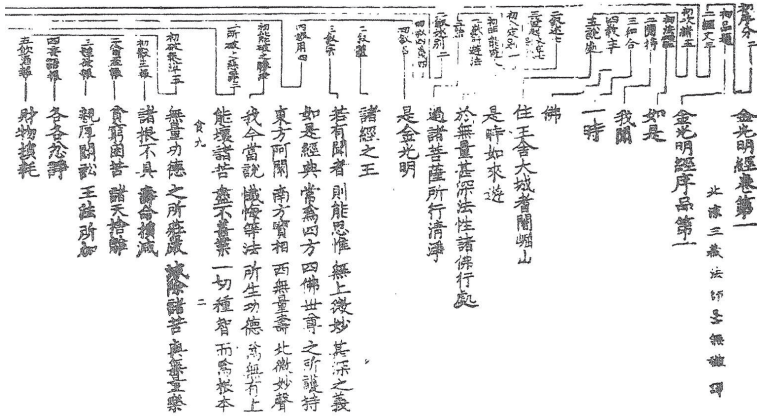
右の二つは、それぞれ「刪略繁重録」と「入蔵録」からの引用である。それらによれば、『合部』八卷本が入蔵するが、その『合部』とは文言が異ならず、重複する、曇無讖訳四卷本および曇無讖訳本に真諦訳出部分を加えた七卷本（あるいは六卷本）は「不入蔵」とする。次節でも見る『合部』の編纂事情および他の二経との関係を踏まえたものである。

右に引用した『開元録』は、宋・元代に、中国で製作された版本大蔵経がもとづく標準目録とされ、実際、宋・元代につくられた版本大蔵経諸本には、曇無讖訳四卷本および曇無讖訳に真諦訳出部分を加えた六卷あるいは七卷本が含まれていない。しかし、明代になって、その編成が大きく見直された永楽南蔵において、曇無讖訳四卷本が単行經典として入蔵し（「食」帙）、それ以降、永楽北蔵、嘉興蔵、龍蔵にも四卷本は単行經典として含まれる（「化」帙）。

特に、曇無讖訳を新たに追加した永楽南蔵に含まれる同本の版本については、かなり特殊な形になっている。すなわち、次ページの図一で示したように、科段などを示す冠註を備えたかたちであり、さらに、大正蔵に含まれる宋代の経序および「懺悔滅罪伝」、大正蔵には含まれない感心記三種も含む⁽¹⁹⁾。おそらく、永楽南蔵所収本は、当時の流布版（街版）をそのまま流用したものであり、大蔵経の一部として正式に製版されたものではない。北蔵以降は、他の経巻同様の版式に整えられて、経序以外の記述も削除されている。

一方、現在研究に広く用いられている大正蔵では、曇無讖訳四卷本は単行經典として収録されているが、それは高麗蔵再雕本を受けたものである。その再雕本では、宋代に新たに訳出された諸典籍を追加して雕造した「追雕分」の「精」帙に含まれる。すなわち、再雕本では、曇無讖訳『金光明經』四卷本の前後は、いずれも宋代に新たに訳出され

図一 「中華大藏經」所収の永樂南蔵本
『金光明經』四卷本の卷一冒頭



た典籍であり、追離分のなかでも同本のみ訳出年代が大きく異なり、そこに組み込まれた経緯もはっきりしない。同時に、再雕本の卷三をのぞいて、通常巻末に見られる定型的な刊記の「甲辰歲高麗国(分司)大藏都監奉勅彫造」が欠けていることも不審な点であり、同本が中国より伝わった版本を底本として開板されたものではない可能性もうかがわせる。可能性としては、当時同国で流布していた写本が版本をもとにしたことも考えられるかもしれない。ちなみに、高麗蔵再雕本末尾の「囑累品第十九」は、再雕本および大正蔵のみに含まれるものであり、経録類でも一貫して曇無讖訳は「十八品」とされていることから、後付けされたものと推測される⁽²⁰⁾。

中国では明代になって、朝鮮半島では高麗蔵再雕本の追離分として、曇無讖訳四卷本が単行經典として、改めて版本大蔵経に加えられた事情、背景として想定されるのは、やはり、同訳に対して、天台智顛をはじめとして、中国においては数多くの注釈書が残されており、特に、中国天台宗では後世まで同経を重視する伝統が続き、また、同経による金光明懺法という実践も行われていたことが大きく影響していたと考えることができる⁽²¹⁾。

このことから、曇無讖訳四卷本は、衆経、一切経においては、比較的早くに真諦訳を追加した六巻あるいは七巻本に取って代わられたり、『開元録』では「不入蔵」とされたにも関わらず、中国・朝鮮半島においては伝統的に重視され、実際にも重用され続けたことで、のちに、版本大蔵経で

は単行經典として追加されることになったものと考えられる。

ちなみに、日本では、『開元録』をうけた『貞元録』によって写本一切経が整備されたので、宋・元代の版本大蔵経同様、日本に伝わる写本一切経諸本では曇無讖訳四卷本は、基本的に「不入蔵」とされたようである。²³ただし、日本でも曇無讖訳四卷本は全く用いられなくなったわけではなく、平安期以降も継続して用い続けられていたことが確認できる。²⁴

三、『合部金光明経』の編纂をめぐる

本節では、隋代に編纂された宝貴合『合部金光明経』（『合部』と略称）について、その編纂事情や背景などを明らかにするために、同経の経序や経録類などにおける記述について、整理・検討することを試みる。

(1) 『合部金光明経』の編纂・成立に関する記事——経序およびそれに類する記述

『合部』の経序は大正蔵にも収められており、同経の訳出状況を伝える最も重要な資料であるので、ここに引用する。「金光明経者、教窮満字、金鼓撃於夢中、理極真空、宝塔踊於地上、三身果備、酬昔報之無虧、十地因円、顕囊修之具足、所以経王之号、得称於斯、将知能弘賛人、其位難量者也。大興善寺沙門釈宝貴者即近周世道安神足、伏膺明匠、寔曰良才、翫閱群経、未嘗釈手、可謂瞿曇身子、孔氏顔淵者焉。然貴觀昔晋朝沙門支敏度合両支・両竺・一白五家首楞嚴五本為一部 作八卷 又合一支・両竺三家維摩三本為一部 作五卷、今沙門僧就又合一識・羅什・耶舎四家大集四本為一部 作六十卷。非止収涓添海、亦是聚芥培山、諸此合経、文義宛具、斯既先哲遺蹤。貴遂依承以為規矩、而金光明見有三本：初在涼世有曇無讖訳為四卷、止十八品。其次周世闍那崛多訳為五卷、成二十品。後逮梁世真諦三蔵於建康訳三身分別・業障滅・陀羅尼最浄地・依空滿願等四品、足前出沒為二十二品。

其序果云「曇無讖法師称：金光明經篇品闕漏、每尋文揣義、謂此說有徵、而讐校無指、永懷寤寐」宝貴每歎此經秘奧、後分云何、竟無囑累旧雖三訳本疑未周、長想梵文、願言逢遇。大隋馭寓、新經即來、帝勅所司相統翻訳、至開皇十七年、法席小問、因勸請北天竺捷陀羅國三蔵法師、此云志德、重尋後本、果有囑累品、復得銀主陀羅尼品、故知法典源散、派別条分、承注末流、理難全具、頼三蔵法師、慧性冲明、学業優遠、内外經論多所博通、在京大興善寺即為翻訳、并前先出合二十四品、写為八卷、学土成都費長房筆受、通梵沙門日嚴寺釈彦琮校練、宝珠既足、欣躍載深、願此法灯、伝之永劫」(大正十六・三五九中下)

さらに、右の『合部』経序と相似した記述が、『歴代三宝紀』と『大唐内典録』『開元釈教録』『貞元新定釈教目録』にも確認できる。基本的に右に引用した『合部』経序にもとづくと考えられるが、経録類の方が具体的に記述している部分もあるので、重複をおそれず、以下にそれら引用する。ただし、『大唐内典録』巻五にみえるものは『歴代三宝紀』巻十二にみえるものとはほぼ同じであり、『貞元録』巻十の記述は『開元録』巻七のものに相似するので割愛し、『歴代三宝紀』および『開元録』の記述のみを掲げる。

●『歴代三宝紀』巻十二(大正四九・一〇五下〜一〇六上)、『大唐内典録』巻五、大正五五・二七八中)

「新合金光明経八卷

右一部八卷、大興善寺沙門釈宝貴開皇十七年合。貴即周世道安神足、翫閱群典、見昔晋世沙門支敏度合、両竺・一白五家首楞嚴五本為一部作八卷。又合一支・両竺三家維摩三本為一部作五卷。今沙門僧就又合二讖・羅什・耶舍四家大集四本為一部作六十卷。諸此合経、文義宛具、斯既先哲遺蹤。貴遂依承以為規矩、而金光明見有三本：初曇無讖訳四卷、其次幅多訳為五卷、又真諦訳復為七卷、其序果云「曇無讖法師称、金光明經篇品闕漏、每尋文揣義、謂此說有徵、而讐校無指、永懷寤寐。梁武帝愍三趣之輪迴、悼四生之漂没、汎宝舟以救溺、秉慧炬以照迷、大同年中勅遣直後張記等、送扶南獻使反国、仍請名僧及大乘諸論雜華経等、彼国乃屈西天

竺優禪尼国三藏法師波羅末陀、梁言真諦、并齋經論恭膺帝旨、法師遊歷諸国、故在扶南。風神爽悟、悠然自遠、群藏淵部、罔不研究。太清元年、始至京邑、引見殿内。武皇躬申頂礼、於宝雲供養。欲翻經論、寇羯憑陵。大法师舛、困難夷謐。沙門僧隱始得諮稟法師訳経、経目果闕、「三身分別」「業障滅」「陀羅尼最淨地」「依空滿願等」四品²⁵。全別成爲七卷。今新來經二百六十部内其間復有「銀主陀羅尼品」及「囑累品」、更請囉多三藏出、沙門彥琮重覆校勘、故貴今分爲八卷。品部究足、始自乎斯。文号経王、義称深妙。願言幽顯、頂戴護持」

・『開元釈教録』卷七（大正五五・五五〇下）『貞元録』卷十、大正五五・八四九上（中）

「合金光明経八卷

二十四品 開皇十七年合、當時四本 見房録 沙門彥琮撰序

右一部八卷其本見在。

沙門釈宝貴、大興善寺僧也。開皇十七年丁巳、合金光明経一部。貴即周世智度論師道安之神足、翫閱群典、見昔晋世沙門支敏度合兩支・兩竺・一白五家首楞嚴爲一部作八卷²⁶。今准祐録及合経記、又合一支・兩竺三家維摩爲一部

作五卷。又沙門僧就合四家大集爲六十卷。諸此合経、文義宛具、斯既先哲遺蹤。貴遂依承以爲規矩、遂合涼世

法豊^{四卷十}

八品者・周称稱藏^{演寿量・大弁}

更出四品、謂三身分別品、業障滅品、陀羅尼最淨地

隋代志德、尼品及囑累品、前後所出

共二十四品分爲八卷。沙門彥琮重覆校、品部究足、始自于斯。文号経王、義称深妙。願言幽顯、頂戴護持」

右で引用した各文では相違する部分もあるが、『合部』の編纂事情として、およそ次のようにまとめることができる。すなわち、釈道安（姚道安）の高弟であつた宝貴は、晋代に、支敏度が『合首楞嚴（三昧）経』および『合維摩詰経』を編纂したことや、同時代の隋代に、僧就が『大集経』六十巻を編纂したことを踏まえて（波線部）、開皇十七（五九七）年に『合部』八巻本を編纂したとされる。

その『合部』編纂の前提・素材になつたが、先行して訳出されていた、次の三本の〈金光明経〉諸本である。

① 曇無讖訳四巻本・十八品

② 耶舍崛多(称蔵) 訳五卷本・二十品

③ 真諦訳七卷本・二十二品

すでに前節でも検討した①と③が、『合部』成立の前提であり、その素材にもなったわけだが、特に、前節での検討からは、曇無讖訳の四卷本に真諦訳出部分を組み合わせた七卷本(あるいは六卷本)が、先行する曇無讖訳に取って代わるような形で流布していたと見られることが、本経『合部』編纂の下地、背景になったとも考えられる。そのことは、引用した『合部』経序でも、真諦訳の経序の冒頭部分が引用されていることから類推できる。

②耶舍崛多(称蔵) 訳については、『合部』の経序では「闍那崛多」とし、『歴代三宝紀』では単に「崛多」とするが、次項で見えていく経録類の記述から「耶舍崛多」としておくのが適当だろうか。この耶舍崛多訳とされる五卷本の伝承などについては次項で検討する。

右のような先行する三本に加えて、④闍那崛多(志徳)が宝貴によって要請されるかたちで新たに訳出した部分、「銀主陀羅尼品」と「囑累品」の二品を加え、二十四品からなる八卷本『合部』が編纂されとされる。また、『合部』編纂に際しては、経録『仁寿録』の撰者としても知られる彦琮や『歴代三宝紀』を著した費長房も関わっていたようである。

なお、大正蔵Ⅱ高麗蔵再雕本では、『合部』の各所に翻訳者名を記すが、これは再雕本にしか見られない独自のものであり、おそらくは再雕本が制作された時に付加されたものと推測できる。²⁷⁾

以上のように、『合部』は、既存の三本および新たに訳出された部分を加えることで編纂された「編輯経典」である。先に述べたように、単行経典である〈金光明経〉の翻訳経典でありながら、各翻訳者が訳出した部分を編輯するかたちをとった、かなり特殊な漢訳経典と言える。

(2) 耶舎崛多(称蔵) 訳五卷本などの伝承および闍那崛多(志徳)らと『合部』編纂の関わり

本項では、未検討の耶舎崛多(称蔵) 訳とされる五卷本の伝承や、新たに闍那崛多(志徳) によって訳出したとされる部分について、史伝・経録類における記述を整理し、さらに、彼ら耶舎崛多・闍那崛多らが『合部』の編纂にどのように携わっていたのかについても探ることを試みる。

まず、耶舎崛多(称蔵) 訳とされる五卷本に関する、経録類での記述については、次のような伝訳に関する記述が『歴代三宝紀』以降の経録類に共有される。

●『歴代三宝紀』卷十一「金光明経更広寿量大弁陀羅尼品五卷第二出、在北胡坊掃聖」(大正四九・一〇〇中)
寺訳、沙門智徳筆受

右のような伝訳、訳出状況をめぐる記述については、『大唐内典録』卷五(大正五五・二七一下)、『大周録』卷第三(大正五五・三八八中)、『開元録』卷第七(大正五五・五四五上)などでもほぼ同様のものが共有される。

一方、『大周録』卷十二(大正五五・四四三上)では、同本を「欠本」と分類しているように、唐代の『静泰録』をはじめ、他の経録の現存目録や入蔵録には記載が一切なく、同本の「伝存」をつたえる記述を経録類に確認することができない。これらのことから、耶舎崛多訳とされる五卷本については、実際にはほとんど流布していなかったとみることができると考えられる。

一方、『合部』編纂に際し、闍那崛多(志徳) が新たに「銀主陀羅尼品」と「囉累品」の二品を訳出したとされるが、それら二品を別立てしたものが、『歴代三宝紀』や『大唐内典録』『大周録』『開元録』『貞元録』にも確認(28)できる。しかし、『開元録』で「不別存」とされていること(大正五五・五四八中)からも、それら二品からなる経巻が独立単行して流布していたとは考えられない。

さらに、耶舎崛多(称蔵) および闍那崛多(志徳)の両名は、ともに闍那耶舎の弟子で、同門の徒として知られる。そのように関係が深かった両名とも、すでに見たように『合部』編纂とは、直接的、間接的な関わりがあったよう

ある。それに関して、『開元録』中の、撰者・智昇によるとみられる記述をもとに検討する。(以下に引用する文言は、大正藏所収の『開元録』では割注の形で記されているが、ここでは便宜的にその形式にはよらない。)

〔前略〕『合部』経序からの引用)：撰録者曰、此合部經文義備足、其無識四卷・真諦七卷・崛多五卷並皆有闕故、此三經無繁重載。謹按長房等録、周武帝代天竺三藏那舍崛多²⁹訳出一本名「金光明經更広寿量大弁陀羅尼經」五卷成部。今詳此名、乃非全訳、但於無識四卷經中統演二品：其寿量品更統、其文大弁品中更広呪法、余品之中亦有統者故、云「更広寿量大弁陀羅尼經」。故六卷台経序云：寿量、大弁又補其闕。以此証知、但是統闕、非是別翻。又経序云「闍那崛多訳為五卷」房等諸録乃云「耶舍崛多」者此二三藏乃是同師、當時共翻互載、皆得其合部経。

一有六卷本与此八卷明同異者、其六卷経一品顛倒、比較新経八卷者是。又二経囑累文意全別。六卷囑累乃与法華囑累大呪相似未詳所以。今勘八卷之者、亦与新経扶同、二本少殊、不可双載故、存八卷為正、編之入藏、後尋覽者幸無惑焉。兼此合経總成五訳、兩本在藏、三本人刪繁録」(大正五五・五九二上)

まず、波線部では、那舍崛多訳とされる「(金光明経)更広寿量大弁陀羅尼経」について述べており、これは全訳でもなく、その題名の通り、「寿量品」を増広し、「大弁財天品」の陀羅尼を拡充したものであることが述べられ、「非是別翻」と明記されているように、別立されたものではなかったと見ている。

次に、傍線部では、五巻本の訳者について、『合部』経序では「闍那崛多」とされ、『歴代三宝紀』などの経録類では「耶舍崛多」とされていることに関して、その両名は同門であり、当時力を合わせて翻訳も行うことで、『合部』を得たとする。つまり先に見た経録類にあるような「耶舍崛多」による訳出部分と「闍那崛多」による訳出部分について、それらを厳密に区別するよりも、同門である耶舍崛多・闍那崛多の両名が力を合わせて、『合部』八巻本の編纂および訳出に関与した可能性も想定してもよいかもしれない。また、先に見たように、耶舍崛多訳とされる五巻本は、単行経典として流布した可能性は低く、その訳出・増広部分については、耶舍崛多・闍那崛多らの同門内で共有され

ていたものであった可能性も想定できる。

同時に、闍那崛多に関しては、他にも『添品妙法蓮華經』や『仏本行集經』といったような「編輯經典」の訳出・編纂にも携わっており、同じく、「編輯經典」である『合部』の編纂にも、編者である宝貴とともに、かなり積極的に関わっていたと考えても良いかもしれない。

以上、前節および本節において、『最勝王經』に先行する《金光明經》漢訳諸本の伝承に関する問題について、主に、史伝・経録類における記述などを洗い直すことで、整理、検討してきた。特に、単行經典である《金光明經》の漢訳經典でありながら、同時に「編輯經典」でもある『合部』編纂の事情と背景については、これまでほとんど問題にされることはなかったようだが、本稿で整理、検討したことで次のようなことが明らかになった。

- 曇無讖訳四巻本と真諦訳出部分とを合わせた六巻あるいは七巻本は、比較的早い段階で、曇無讖訳四巻本に取ってかわるようになかたちで流布した可能性がうかがえ、それが『合部』編纂につながる背景、下地となった。
- 那舍崛多訳とされる五巻本についてはほとんど流布した形跡もなく、『合部』の訳出と編纂には、那舍崛多と闍那崛多の兄弟弟子が何からの関与をしていた可能性も窺える。

いずれの事柄も可能性にとどまるものであるが、『合部』編纂の背景や過程について、従来よりもわずかながらでも明らかにすることができたと考える。

四、義浄訳『金光明最勝王経』訳出の状況について

本節では、義浄訳『金光明最勝王経』十巻本の訳出をめぐる状況について、経録類の記述や訳場列位の記述を紹介する。義浄訳については、八世紀初めの訳出ということで、これまで見てきた諸本よりかなり時代が下り、『最勝王経』訳出前後の状況については、『開元録』に残された記述から、かなり詳細な事柄までがわかる。また、『最勝王経』に関する訳場列位に関しては、すでに先行研究でも幾度か紹介されているが、『最勝王経』訳出状況の詳細をつたえる記述として、本稿でも再掲する。

まず、『開元録』巻九「総括群経録上之九唐伝訳之余」にみられる、義浄および『最勝王経』に関する伝訳の記述を紹介する。これらの記述は『宋高僧伝』などにも受け継がれるものである。³⁰⁾

・「金光明最勝王経十巻 第五出 与北凉曇無讖四卷金光明等同本、長安三年十月四日於西明寺訳畢、沙門波窟慧表筆受」(大正五五・五六七上)

・「沙門釈義浄、齐州人、俗姓張、字文明。…(中略)…咸亨二年三十有七、方協夙懷、遂之広府。初結誓同志、数満十人。泊乎汎舶、余皆退罷、唯浄堅心転熾、遂即孤行。備歴艱難、漸達印度。…(中略)…遍師明匠、学大小乘、所為事周還帰故里、凡所歴遊三十余国、往来問道、出二十年。以天后証聖之元乙未仲夏還至河洛、将梵本経律論、近四百部、合五十万颂、金剛座真容一鋪、舍利三百粒。天后敬法重人、親迎于上東門外、洛陽緇侶備設幢幡、兼陳鼓楽、在前導引、勅於仏授、記寺安置、所将梵本、並令翻訳。初共于闐三蔵実、又難陀翻華嚴経、久視已、後方自翻訳。即以久視元年庚子至長安三年癸卯、於東都福先寺及西京西明寺、訳金光明最勝王・能断金剛般若・入定不定印・弥勒成仏・一字呪王・莊嚴王陀羅尼・善夜・流転諸有・妙色王因縁・無常・八無暇有暇・長瓜梵志等経・根本説一切有部毘奈耶・尼陀那目得迦・百一羯磨及律撰等、掌中・取因仮設・六門教授等論及竜樹勸誠頌、已上二十部一百一十五卷。北印度沙門阿彌真那証梵文義、沙門波窟・復礼・慧表・智積等筆受証文、沙門法宝・法蔵・

徳感・成莊・神英・仁亮・大儀・慈訓等証義、成均太学助教許觀監護繕写進内、天后製新翻聖教序、令標經首。暨和帝竜興神竜元年乙巳、於東都内道場訳孔雀王經……(中略)……淨雖遍翻三藏、而偏功律部、訳綴之暇曲授学徒、凡所行事皆尚其急、瀟灑滌穢特異常倫、学侶伝行、遍於京洛。美哉亦遺法之盛事也。以先天二年卒、春秋七十九矣」(大正 五五・五六八中〜五六九中)

右の伝記的な記述から、義浄は咸亨二(六七二)年よりおよそ二十五年間外遊したのちに、証聖元(六九五)年に帰朝し、およそ四百部もの仏典を将来したとされる。帰朝後、まずは、実叉難陀とともに『八十華嚴』の訳出に取り組み、久視年間以降は義浄自身が仏典翻訳に取り掛かったようである(波線部)。

右の引用文では、細かい年代までは記されていないが、同じく『開元録』巻九にみえる、義浄訳の他の典籍に付けられた注記からは、『最勝王経』と同じく「長安三(七〇三)年十月」に、西明寺にて訳出されたとされるのは、次の八点である。

- 『能断金剛般若波羅蜜多經』 一卷
- 『曼殊室利菩薩呪藏中一字呪王経』 一卷
- 『掌中論』 一卷
- 『取因仮設論』 一卷
- 『六門教授習定法』 一卷
- 『根本説一切有部尼陀那得迦』 十卷
- 『根本説一切有部毘奈耶』 五十卷
- 『根本説一切有部百一羯磨』 十卷

『最勝王経』を訳出した長安三(七〇三)年以前あるいはそれ以降に義浄が翻訳した典籍についても、『開元録』に残された注記から、さらに細かい年代がわかるが、ここでは割愛する。また、傍線を施したとおり、久視元(七〇〇)年から長安三(七〇三)年までの間、義浄は洛陽(東都)の大福先寺および長安(西京)の西明寺にて訳業を行なったと見

られる。その当時の訳場における役割分担を示す訳場列位の大まかなものは、右の引用文にも含まれるが(破線部)、あとで見る『最勝王経』に付される訳場列位はさらに具体的である。

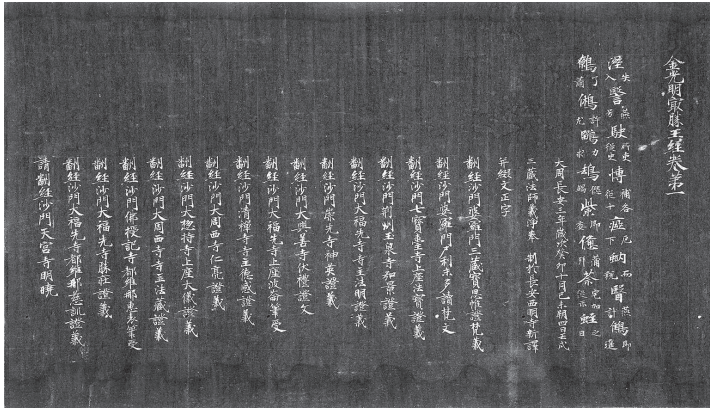
右の引用文の破線部末尾にあるように、久視元(七〇〇)年から長安三(七〇三)年にかけて義浄によって訳出された經典の冒頭には、武則天による「聖教序」が掲げられるようになったことが伝えられるが、現在、大正蔵所収の当該經典で、武則天による「聖教序」を収録するのは『入定不定印経』(大正四六四番)に限られるようである。『最勝王経』に関しては、高麗蔵再雕本を含むほとんどの版本大蔵経では、唐の中宗によるとみられる「大唐中興三蔵聖教序」が付される。大正蔵で同序が割愛された理由は不明であるが、次に見る国分寺経など、日本に伝わる『最勝王経』の写本にはそれらが含まれていないことが影響したのかもしれない。ちなみに、大正蔵のみに見られる巻十末尾の「此経梵策英国王立垂細垂協會所蔵」以下の六行は、おそらく大正蔵編纂時に新たに付加されたものと見られる。次に、『最勝王経』が伝える訳場列位についてであるが、これについては、古くは、奈良・西大寺本に見えるものを鵜飼徹定『譯場列位』(一八六三年)⁽³¹⁾が紹介している。また、壬生台舜氏や日野慧運氏は、鵜飼が紹介しているものには触れずに、敦煌写本に見られる訳場列位を紹介している⁽³²⁾。一方、近年ウェブ上でも閲覧することができるようになった奈良国立博物館蔵の国分寺経、紫紙金泥『金光明最勝王経』(国宝)の巻一および巻十の巻末にも、同じく訳場列位が記されている⁽³³⁾。

ここでは、西大寺本にもとづく、鵜飼『譯場列位』(八丁く九丁)所載のものをもとに、奈良国立博物館蔵の国分寺経の奥書も参照して、若干修正を加えたものを掲げる。

「大周長安三年歲次癸卯十月巳未朔四日壬戌

三蔵法師義浄奉 制於長安西明寺新訳並綴文正字

翻經沙門波羅門三蔵宝思惟証梵義



図二 国宝 金光明最勝王經（国分寺経）
卷第一 奥書（奈良国立博物館蔵、
画像提供 奈良国立博物館、撮影
佐々木香輔）

翻經沙門波羅門戶利末多誦梵文
 翻經沙門七宝台寺上座法宝証義
 翻經沙門荊州玉泉寺弘景証義
 翻經沙門大福光寺主法明証義
 翻經沙門崇光寺神英証義
 翻經沙門大興善寺伏礼証文
 翻經沙門大福光寺上座波崙筆受
 翻經沙門清禪寺寺主德感証義
 翻經沙門大周西寺仁亮証義
 翻經沙門大總持寺上座大儀証義
 翻經沙門大周西寺主法藏証義
 翻經沙門仏授記寺都維那惠表筆受
 翻經沙門大福光寺勝莊証義
 翻經沙門大福光寺都維那慈訓証義
 請翻經沙門天宮寺明曉
 （西大寺本…大学助教教許観監護繕写進内／敦煌写本…請翻經沙門竜興寺法海勸記）
 右に引用した『最勝王経』の訳場列位は、『開元録』に言及されているものや他の義浄訳の典籍に残されたものとも相違するが、それは、訳場列位、

すなわち、訳場における役割分担が訳出時期や場所、訳出典籍によって変更されることを反映したものである。

以上、経録類などからわかる『最勝王経』をめぐる訳出状況は右の通りであり、同経以前の他本よりも、かなり具体的な訳出状況がわかる。このような状況で訳出された『最勝王経』に関しては、本邦での受容・影響はいうに及ばず、チベット語訳大蔵経（カンギユル）には漢訳『最勝王経』から訳出されたものが伝わり、ユータン語訳の一部、ソグド語訳、ウイグル語訳、西夏語訳、満州語訳なども義浄訳にもとづくこととされ、同漢訳経典は、他の漢訳経典にはみられないような影響力を広くアジア世界に及ぼしたとされる。

（本研究はJSPS科研費二〇H〇一一八五の助成を受けたものである。）

〈金光明經〉漢訳諸本の翻訳と伝承に関する諸問題

Skt 本 (Nobel ed.)	曇無讖訳 (4巻本)	合部 (8巻本)	義浄訳 (10巻本)	分科
品名	巻品名	巻品名	巻品名	
1 nidāna	1 1 序	1 1 序	1 1 序	序分
2 tathāgatāyuhpramāṇa	2 寿量品	2 寿量品 (囉多訳補)	2 如来寿量品	正宗分
---	---	3 三身分別品 (真諦訳)	2 3 分別三身品	
3 deśanā	3 懺悔品	2 4 懺悔品	4 夢見金鼓懺悔品	
---	---	5 業障減品 (真諦訳)	3 5 滅業障品	
---	---	3 6 陀羅尼最淨地 品 (真諦訳)	4 6 最淨地陀羅尼品	
4 kamalākaro nāma sarvatathāgatastava	4 讚歎品	4 7 讚歎品	5 7 蓮華喩讚品	
---	---	---	8 金勝陀羅尼品	
5 śūnyatā	5 空品	8 空品	9 重顯空性品	
---	---	9 依空滿願品 (真諦訳)	10 依空滿願品	
6 caturmahārāja	2 6 四天王品	5 10 四天王品	6 11 四天王觀察人天 品	
---	---	6 11 銀主陀羅尼品 (闍那堀多訳)	7 12 四天王護国品	
---	---	---	13 無染著陀羅尼品	
7 sarasvatī	7 大弁天神品	12 大弁才天品 (闍那囉多統訳 補)	14 如意宝珠品	
8 śrīmahādevī	8 功德天品	13 功德天品	15 大弁才天女品	
9 buddhabodhisattva- nāmasaṃdhāraṇa	9 堅牢地神品	14 堅牢地神品	16 大吉祥天女品	
10 dṛḍhā	3 10 散脂鬼神品	15 散脂鬼神品	17 大吉祥天女增長 財物品	
11 saṃjñāya	11 正論品	16 正論品	18 堅牢地神品	
12 devendrasamayam nāma rājasāstra	12 善集品	7 17 善集品	19 僧慎爾耶藥叉大 将品	
13 susāmbhava	13 鬼神品	18 鬼神品	9 20 正法正論品	
14 yakṣāsrayo nāmārksā	14 授記品	19 授記品	21 善生王品	
15 daśadevapurasa- sraṇyākarāṇa	15 除病品	20 除病品	22 諸天藥叉護持品	
16 vyādhipraśamana	4 16 流水長者子 品	21 流水長者子品	23 授記品	
17 jalavāhanasya matsya- vaineyapūrvayoga	17 捨身品	8 22 捨身品	24 除病品	
18 vyāghrī	18 讚仏品	23 讚仏品	25 長者子流水品	
19 sarvatathāgatastava	---	---	10 26 捨身品	
---	---	---	27 十方菩薩讚歎品	
---	---	---	28 妙懺菩薩讚歎品	
---	---	---	29 菩提樹神讚歎品	
---	19 (囉累品)	24 付嘱品 (闍那囉多訳)	30 大弁才天女讚歎 品	
			31 付嘱品	

表二 〈金光明經〉漢訳諸本三種とサンسكريット本の比較対照表

注

* 本稿の執筆にあたっては、京都大学人文科学研究所の船山徹先生より、様々な有益な助言や情報および原稿に
関する修正案をいただいた。ここに記して衷心より謝意を表する。いうまでもなく、残された不備、問題点は
全て筆者に帰する。

(1) 例えば、チベット語大蔵経のキャンギュル(仏説部)では、(金光明経)として三種の翻訳が伝わるが、テンパン
マ系(グループ)と呼ばれる、二大系統のひとつでは、「経部」と「密部」それぞれに、その三種のチベット
語訳『金光明経』が伝わる。もう一方の二大系統のひとつ、ツェルバ系(グループ)では「密部」に配されて
いる。詳しくは、烏力吉吉日嘎拉『金光明経』の思想的研究——「空性品」「金勝陀羅尼品」「最淨地陀羅尼
品」を中心に——(東洋大学学位請求論文、学位授与二〇一五年三月二十五日)八く十頁参照。これはキャンギュル
における同経の分類が揺れていたことを示唆する事象と考えられる。

(2) 対照表の作成に際しては、佐伯俊源「金光明最勝王経の思想と流伝」(『国宝 西大寺本金光明最勝王経天平宝字
六年百濟豊虫願経』、勉誠出版、二〇一三年)および『金光明経の研究——説法師と経典編纂についてのケース
スタディ』(Bibliotheca Indologica et Buddhologica 23、山喜房佛書林、二〇一八年)所載の比較対照表を参照した。

(3) 「編輯経典」については、船山徹『仏典はどう漢訳されたのか——ストラが経典になるとき』(岩波書店、二〇
一三年)一四九く一七六頁に詳しい。『合部』に関しては、同書一六一頁で言及されており、「編輯経典」のジ
ヤンルのひとつ、「異なる訳者の部分訳をつないで一つにしたもの」の一例として掲げられる。

(4) 同じように中国で訳出・編纂がなされた「編輯経典」としては『添品妙法蓮華経』が知られる。船山前掲書
一六一頁参照。同書では、いわゆる南本『大般涅槃経』も類似する例として挙げ、支敏度による『合維摩
経』『合首楞嚴』『三昧』経』も先行した例として掲げるが、大蔵経に含まれる漢訳経典でこのような特殊な編

纂過程が取られたものは点数がかなり限られる。

(5) 例外的に、『合部』に含まれる、真諦訳出部分について考究した最近の論考として、マイケル・ラディッチ (Michael Radich) 氏による次の論文二篇がある。

• M. Radich [二〇一四], “On the Sources, Style and Authorship of Chapters of the Synoptic *Suvarṇaprabhāṣottama-sūtra* T664 Ascribed to Paramārtha (Part 1),” *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University* 17, pp.207-244.

• M. Radich [二〇一五], “Tibetan Evidence for the Sources of Chapters of the Synoptic *Suvarṇaprabhāṣottama-sūtra* T 664 Ascribed to Paramārtha,” *Buddhist Studies Review* 32.2, pp.245-270.

右の二篇は『合部』に含まれる真諦訳出部分がインド語テキストにもとづいたものではなく、中国において編纂されたものであることを論証しようとした意欲的な論考である。ただ、現時点では、同氏の説については仮説の域を出ないと思われるので、本稿では同氏の説を取り込んで論ずることはここでは保留する。

(6) 藤谷厚生「金光明經の教学史的展開について」『四天王寺国際仏教大学紀要』三九、二〇〇四年)

(7) 具体的には、「SAT大正新脩大藏経テキストデータベース」(<https://21dtk1.u-tokyo.ac.jp/SAT/> 最終閲覧二〇二〇年十一月三十日)を利用する。

(8) 衆経とも呼ばれた一切経と経録類の関わりについては、拙著『大藏経の歴史——成り立ちと伝承』(方丈堂出版、二〇一九年)一〇四〜一二二頁参照。

(9) 吉川忠夫・船山徹訳『高僧伝』(一)(岩波文庫、二〇〇九年)二三二頁によれば、曇無讖訳出經典が建業(建康)に至ったのは、四三〇〜四三二年ごろとする説が有力なようである。

(10) 宋元明三本によって直す。高麗藏および大正藏は「十」とする。

(11) 聖語藏経卷に含まれているもので、伝統的に「神護景雲経」とされてきた経卷のほとんどが、実は宝亀年間
に書写された「今更一部一切経」であったことが近年明らかにされている。飯田剛彦「聖語藏経卷「神護景
雲二年御願経」について」『正倉院紀要』三四、二〇一二年 参照。

(12) 船山徹「真諦三蔵の著作の特徴——中印文化交流の例として」『関西大学東西学術研究所紀要』三八、二〇〇五
年)の「注(六)」によれば、小野氏は「楞学人」「楞生」という名前でも論文を執筆し、合計三篇の論文
で聖語藏経卷にみられる経序について扱っているが、筆者は小野玄妙『仏教経典総論』(「仏書解説大辞典」別
巻、大東出版社、一九三六年)一三〇頁所収のものしか実見できていない。また、前掲 M. Radich [二〇一四]で
も「金光明経序」およびそれに続く「寿量品」を扱っている。

(13) 船山徹 [二〇一九]『六朝隋唐仏教展開史』(法蔵館 一九五頁以下参照。同書にも引用されているが、『歴代三
宝紀』卷十二(大正四九・一〇五下〜一〇六上)および『大唐内典録』卷五(大正五五・二七八中)では、「新合金
光明経八卷」に関する記事の中に、ここに掲げた「金光明経序」からの引用文が見える。また、『大周刊定衆
経目錄』卷三(大正五五・三八八上)でも、同じく「新合金光明経八卷」に関する記事の中で、かなり簡潔な
かたちの引用が確認できる。

(14) 宋元明三本にみえる「涼世」をとる。

(15) 類似したものが『開元釈教録』卷六(大正五五・五三八下)および『貞元録』卷九(大正五五・八三六中〜下)で
も共有される。

(16) ここでも大正蔵では「梁世」となっているのを、注14同様、「涼世」と訂正する。

(17) 小野前掲書『仏教経典総論』では、経序に見られる記述の方が史伝・経録類に見られるものよりも正確であ
ると主張するが、その根拠は特に明示されておらず、いずれが正確なものを反映しているかは現時点では不

明とした。

(18) 小野前掲書『仏教経典総論』参照。また、M. Radich [二〇一四]では、聖語蔵経卷の卷一「寿量品」の一部も紹介している。

(19) 永楽南蔵所収本では、卷一のあとに「金光明経懺悔滅罪伝」が付され、卷二のあとに「金光明経感応」、卷三のあとに「感応」、卷四のあとに「天台大師講金光明経感応」がそれぞれ付される。「金光明経懺悔滅罪伝」については大正蔵でも卷四の後に付されるが、それは聖語蔵経卷所収のものにもとづく。卷二のあとに「金光明経感応」は『高僧伝』卷一の冒頭「攝摩騰」に関する記述にもとづくものである。卷三のあとに「感応」は道宣撰『集神州三宝感通録』卷下(大正五二・四二八上)および同撰『大唐内典録』卷十(大正五五・三三九下〜三四〇上)に見られる。「釈空蔵」に関する記述であり、卷四のあとに「天台大師講金光明経感応」は、灌頂撰『隋天台智者大師別伝』(大正五〇・一九三下)にみえる記述にもとづいたものである。

(20) 高麗蔵再雕本およびそれにもとづく大正蔵にも収録される、曇無讖訳四卷本末尾の「囑累品第十九」の内容は、再雕本や大正蔵所収の『合部』「付囑品第二十四」の末尾部分「爾時釈迦牟尼仏、從三昧起、現大神力」以下の部分(大正十六・四〇二下〜四〇二上)とほぼ重複する。同時に、『合部』の右の部分は、大正蔵(=高麗蔵再雕本)以外の江南諸蔵や聖語蔵経卷には欠けており、曇無讖訳の「囑累品」と相似した伝存状況である。その両経に共通する記述の来歴は現時点では不明である。

(21) 宋代の中国天台宗における『金光明経』研究史については、林鳴宇『宋代天台教学の研究——「金光明経」の研究史を中心として』(山喜房佛書林、二〇〇三年)が詳しく。

(22) ただし、高麗蔵初雕本・再雕本所収の『貞元録』卷三十では、曇無讖訳四卷本について「不入蔵」とする記述にはなぜか含まれてない。

「金光明經七卷^{或六卷}_{二十二品}

右二部一十卷(？)、与藏中八卷者文句不異。其八卷本、品数備足、故留入藏、此二皆闕、故不存之。
其八卷本有二十四品」

なお、日本で書写された『貞元録』の記述については現時点で確認できていない。

(23) 日本に仏教が伝来して間もなく、曇無讖訳『金光明經』四卷本が伝わり、それらが広く流布したようだが、やがて『最勝王經』が伝わり、それにもとづいて、国分寺が諸国に建立されるとともに、やがて、宮中では同経をもちいた「最勝会」が年中行事とされ、『最勝王經』のほうが重視されるようになった。一方で、六国史のなかには、曇無讖訳四卷本が継統して用いられていることも伝わる。例えば、『続日本後紀』卷十九の嘉祥二年(八四九)五月戊辰(十五日)には清涼殿で『金光明經』四卷本が講じられ、夜には礼懺が行われた記述が見られる。また『日本三代実録』卷四十九の仁和二年(八八六)四月三日には、同じく『金光明經』四卷本が転じられたことが記されている。

さらに、須藤弘敏『法華經写経とその莊嚴』(中央公論美術出版、二〇一五年)一三〇頁でまとめられているように、史料に残る平安時代に書写されたとされる金字写経については、曇無讖訳四卷本『金光明經』のほらが、『最勝王經』よりも多く書写されたと伝わる。また、鎌倉時代書写の「目無經」と呼ばれる経巻群中の『金光明經』も曇無讖訳四卷本であり、中世初期まで同本が書写に用い続けられていたことが知られる。

(24) 大正蔵では「百」とするが「白」、すなわち「白延」の誤記と考えられる。ちなみに、「両支・両竺・一白」というのは、支婁迦讖と支謙(両支)、竺法護と竺叔蘭(両竺)、そして白延のことである。『出三蔵記集』卷二(大正五五・一四上)参照。

(25) 先に引用した真諦訳本の経序とされるものには、この部分までの記述が確認でき、ここまでが同経序からの

引用とみられる。

(26) これら『合首楞嚴』『三昧』経』と『合維摩詰経』は現在失われており、その詳細は不明だが、残された経序の記述(『出三蔵記集』巻七・八所収)からは、船山前掲書『仏典はどう漢訳されたのか』一六二頁でも解説されているように、恐らくは、全訳本数種を比較対照するためのものであったとみられ、『合部』のように、複数の訳者によって訳出された、いくつかの部分を接合して、ひとつの典籍としてまとめられたものとは異なるようである。

(27) M. Radich [1014] 参照。ちなみに、高麗蔵初雕本所収の『合部』巻一では、各所に訳者名は記されていないことが確認できるので、やはり、再雕本編纂の過程で挿入された可能性が大きいと考えることができる。

(28) 具体的には、『歴代三宝紀』巻十二(大正四九・一〇四上)、『大唐内典録』巻五(大正五五・二七六中)、『大周録』巻三(大正五五・三八八中)、『開元録』巻七(大正五五・五四八中)、『貞元録』巻十(大正五五・八四六下)に「金光明経囑累各品銀主品合一巻」あるいは「金光明経銀主陀羅尼品囑累品一巻」といった記述が見られる。

(29) ここの「那」は正しくは「耶」であると推測できる。

(30) 具体的には『宋高僧伝』巻一「訳経篇 義浄伝」(大正五〇・七一〇中以下)。

(31) 鵜飼徹定『譯場列位』については明治期以降にも何度か再版されているが、もとの刊行本については非売品であるために入手が難しいが、その精細な画像が、現在「佛教大学図書館デジタルコレクション——佛教大学図書館所蔵・貴重書等アーカイブ」(<https://brd.bukkyo-u.ac.jp/collections/titles/yakujoretsum/>、最終閲覧二〇二〇年十一月三十日)にて閲覧できる。また、西大寺本『金光明最勝王経』については、『国宝 西大寺本金光明最勝王経 天平宝字六年百濟豊虫願経』(勉誠出版、二〇一三年)として、高精細な写真版が公刊されている。

(32) 壬生台舜『金光明経』(仏典講座十三、大蔵出版、一九八七年)および日野前掲書では、敦煌写本のスタイン将来

本 Or. 8210/S. 523 ユベリオ将来本 P.2585 を用いる。

- (33) 奈良国立博物館蔵の「国分寺経」(国宝)は、もとは備後の国分寺に伝わったものとされ、十巻全てを具備する。「奈良国立博物館収蔵品データベース」(<https://www.narahaku.go.jp/collection/759-0.html>) 最終閲覧二〇二〇年十一月三十日)にて、その全巻の画像が閲覧できる。また、大東急記念文庫所蔵の筑前黒田家旧蔵とされる、同じく『金光明最勝王経』巻第十(重要文化財)の巻末にも、「国分寺経」とほぼ同一の訳場列位が記される。『時代の美——五島美術館・大東京記念文庫の精華——第一部 奈良・平安編』(五島美術館、二〇二二年)十九頁参照。

- (34) 他の義浄訳のうち、大正蔵では、『根本説一切有部尼陀那』巻第一(大正一四五二番)、『根本説一切有部毘奈耶尼陀那目得迦撰頌』(大正一四五六番)、『根本説一切有部毘奈耶雜事撰頌』(大正一四五七番)、『成唯識宝生論』(大正一五九一番)には、訳場列位を伝える。ただし、いずれも宋本や元本にもとづくもので、高麗蔵再雕本にはそれらの訳場列位は含まれないようである。

(みやざき てんしょう・鶴見大学仏教文化研究所専任研究員(准教授))